

目的 旧法隆寺献納御物である金銅透彫灌頂幡の天衣を研究することでこの幡の製作年代を推定した昨年を引き続き、今回はこの幡に多く見られる忍冬唐草文を調べることによって、その美しさと製作年代を推定しようとするものである。

方法 金銅透彫灌頂幡の天蓋部、天蓋の四隅につるす暖簾状金具、中央に垂れる大幡と小幡にある忍冬唐草文と前回扱わなかった金銅小幡の中にある美しいリズムを持った忍冬唐草文と、朝鮮高句麗時代の遇賢里中墓壁画や、中国北魏時代の龍門石窟や鞏県石窟の龕の忍冬唐草文との比較、又日本の飛鳥仏や法隆寺仏の背光、法隆寺四天王獅子狩文、玉虫厨子、天寿国繡帳等の忍冬唐草文とを比較検討した。

結果 古代エジプトに生まれたロータス花から出発した唐草であるエジプトバルメットが、アッシリア、フェニキア、古代ペルシャなどを経て、古代ギリシャの美的感覚で自由なゆれ動くリズムミカルな唐草文様に完成された。それがササンペルシャやインドのグプタ様式の影響を受けて、西城を経て敦煌へと伝わり、又古代中国の鸞鬘文様に見られるC字型唐草とも融合して朝鮮の高句麗時代の忍冬唐草文、中国の北魏文様が日本に入り、飛鳥時代の仏像に忍冬唐草文が多く見られた。金銅透彫灌頂幡の忍冬唐草文は特に玉虫厨子に数多くある忍冬唐草文との類似が多く、玉虫厨子の製作を、「聖徳太子傳私記」の記録から、鎌倉時代に橘寺滅滅の際法隆寺へ移し推古天皇御物とされたとするならば、金銅透彫灌頂幡は飛鳥時代の終りの頃の作ではないかと推定する。